ハレバレモンスターSTORY

第１章

第２話　プログラム

ハレバレタウンにあるアカナツ学園。
いつもデバイスをカタカタといじっている無愛想な少年テツ。

その姿を見ながら何がそんなに面白いのか興味があるリィ。

『ねぇ何してるの？』
「別に」
『面白いの？』
「まあ」

カタカタカタ

『数字と英語ばっかりじゃん、なんて書いてあるの』
「プログラムの言葉」
『ええっ！？機械の言葉って数字と英語ばっかなの？』
『私、喋るのは得意なんだけど文字にするの苦手なんだよね、機械との会話ずっと先になりそう。』

カタカタカタ

『そういえば、テツくんは夏休みの読書感想文、何読むか決めてるの？』
「フェルマー」
『え？何それ？」
「数学者」

カタカタカタ

「・・・はぁ。リィさんは？」
『私はねえ、もう読んだんだ！』
「えっ？夏休みまだだよ。」
『でも絶対、宿題で出るじゃん！だったら先に読んじゃってたらその分遊べるでしょ！』
「そりゃそうだけど、それを自慢したくてわざわざ話しかけてきたの？」
『そんなわけないじゃん、何がそんなに面白いのかなって興味。』
「・・・いろいろ便利ってだけ。それよりもう読んだならさっさと感想文書いちゃえば？」
『それがさぁ、感想ってこうやって話してるといろいろ出てくるんだけどいざ書こうとするとっていうか、文字にすると途端に何にも出てこないんだよね。』
『昨日だって机に向かって書こうってしたんだよ、クライマックスのシーンなんて私号泣しながら読んでてさ、そこで出てきた友達のセリフがまたーー

カタカタカタカタカタカタ

ーっていう最初の伏線回収のラスト。どう？面白いでしょ？』
「まあ、でももう全部ネタバレされたから読まないけどね。」
『えええーーーーー』
「それより、ハイこれ」
『何？』
「リィさんがさっき喋った感想を全部文字にしてみた。」
『ええっ何これ！文体まで整ってるじゃん！』
「言ったでしょ、いろいろ便利だって。」
『ホントに便利。すっご！･･･でもそれってテツくんがそうしようって思ったからでしょ。』
「えっ？」
　さっきまで驚きと興奮だった声が、澄み切った湖のように表情を変えていた。
『テツくんがすごいってこと。ありがとっ！』
「いや、別に。。。」

照れながらも誰かに認められたことが嬉しかった。
だけどそれ以上に好きなことで誰かの役に立てたことがたまらなく嬉しかった。